

国際教育研究フォーラム

2021年 8月

国際教育研究所

目次	ページ
教員のICT活用能力をどう高めるか	小山 悦司 1
モンゴル国における CLIL 授業に関する教員研修	坂本 南美 2 ~ 7
コロナ禍の子どもたちと美術教育	神吉 脩 8 ~ 12
編集後記	12

教員の ICT 活用能力をどう高めるか

国際教育研究所所長 小山 悦司

文部科学省は、教職課程で学生が小中高校の教員免許を取得する際、ICT（情報通信技術）を活用した教育に関する科目の履修を義務付けた（省令改正通知 2021 年 8 月 4 日付）。

新科目の名称は、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」（1 単位以上）とされ、2022 年 4 月入学生から適用される。具体的な内容は、1) 端末を効果的に使った各教科の指導、2) デジタル教材の作成、3) 遠隔教育の実施方法などから構成される。

コロナ禍でのオンライン授業等に伴う ICT 需要の急拡大に伴い、小中学校では「GIGA スクール構想」が当初計画の前倒しにより整備され、児童生徒に 1 人 1 台の端末配布がほぼ達成された。しかしながら、端末を使用する教員の ICT 活用能力には、大きなばらつきがみられる。「デジタルネイティブ世代」と呼ばれる児童生徒の間からは、基本操作に不慣れな教員への信頼が失墜するとされる、いわゆる「先生 ICT 使えない問題」が浮上しつつある。

こうした状況を受けて、教員の ICT 活用能力の底上げが急務となり、現職教育としての ICT 研修の充実だけでなく、養成教育段階での新 ICT 科目の必修化へと至ったのである。

さて、教員の ICT 活用能力を高めるためには、どのような点に留意すべきであろうか。日々刻々と進化すると同時に陳腐化するペースも速いとされる ICT に対応するためには、教員としての根本的な発想や姿勢の転換が求められる。

その 1 は、「教員は常に最新の ICT を熟知しなくてもよい」という発想である。ICT 活用においては、次々と新しいツールやサービスが提供されるので、必要であればその都度オンライン研修や教員相互の校内研修で自ら学ぶ方法を確立することが重要となる。

その 2 は、「子ども達と一緒に学ぶ」という発想である。ICT を活用した授業では予期せぬトラブルが発生することを前提とすべきである。起きた場合には、子ども達を巻き込んで課題解決に取り組むことで ICT リテラシーを共に育むことにつながる。

その 3 は、1 人 1 台端末時代を迎えても「ICT 活用を目的化してはならない」ことである。ICT により一人ひとりの子どものデータを分析し、「個別最適化された学び」を提供することに異論はないが、「人格の完成」を目指すという教育本来の目的を忘れてはならない。

モンゴル国における CLIL 授業に関する教員研修

岡山理科大学 教育学部 中等教育学科 坂本 南美

はじめに

Content and Language Integrated Learning (CLIL : 内容言語統合型学習) は、学習者が目標言語で特定の教科やテーマを学ぶことによって、内容の理解とその言語の運用能力、学習スキルの向上を同時に進めることができる教授法 (参考文献 5, 6) である。ヨーロッパで始まった CLIL は、英語だけでなく多様な言語を用いた教科横断的授業実践の一つとして、アジアの国々でも初等教育の中で CLIL が成果を上げている。昨今の日本では、特に小学校英語教育の目標に即したアプローチとして注目が高まっており、教員を対象とした授業研究や教員研修も開催されるようになった。本稿では、モンゴル国の学校で実施した CLIL 授業の教員研修の様子と今後の CLIL 授業の可能性について報告する。

1. CLIL とは

近年、ヨーロッパ発祥のアプローチである Content and Language Integrated Learning (CLIL : 内容言語統合型学習) という外国語教育方法が広まっている。ヨーロッパでは、1990 年の EU 統合によって、様々な国の人々が共通に理解する言語を持つことの重要性が増した。その中で、英語を母語としない国々で、共通言語として英語を学ぶ際のアプローチとして CLIL が生まれた。

CLIL は、内容と言語の双方に焦点を当てることによって言語力の発達を促す教育的アプローチ (参考文献 5, 6) である。例えば、日本で、英語を用いて、理科や社会などの教科の内容に重きを置く授業実践などが挙げられる (参考文献 2, 4)。授業では、ペアやグループでのコミュニケーション活動を通して学習者の思考を深め、最終的にはアウトプットへと導く枠組みとなっている。内容としては、理科や社会、音楽、図工、体育などの教科学習、時事・環境問題などの幅広いテーマに焦点を当て、外国語の語学学習と統合して実践する。言語活動を通して学ぶことで、4 技能 (読む・聞く・書く・話す) を総合的に学ぶことができ、学習者の発信力を高め、外国語教育の質的な向上をもたらすものとして、国内外でも期待が高まっている。

CLIL の授業形態では、ペアでの対話、グループでの討論、クラス全体での発表活動など、アクティブ・ラーニングの活動が軸にある。その中心には「4Cs」として、①教科の内容

(Content)、②言語 (Communication)、③思考 (Cognition)、④協学 (Community /Culture) の4つの概念を有機的に結びつけて質の高い教育を実現できることが挙げられている。また、CLIL 授業を行う際に留意すべき原則として、10 の項目も挙げられており (参考文献 1)、それらの内容は、昨今の日本の英語教育改革の中で、特に小学校で実践可能なアプローチの一つとして注目を集め、広まりを見せている。効果的に実践力を伸ばすこの授業方法は、「言語を学ぶ」視点から「言語で学ぶ」視点へと外国語授業の捉え方をシフトさせ、具体的な教育技法が体系化されていることも特徴の一つである。

【CLIL の原則】

- ・内容学習と語学学習の比重を等しくする
- ・オーセンティック素材 (新聞、雑誌、ウェブサイトなど) の使用を奨励する
- ・文字だけでなく、数字、図版、音声、映像による情報を与える
- ・さまざまなレベルの思考力 (暗記、理解、応用、分析、評価、創造) を活用する
- ・タスクを多く与える
- ・協同学習 (ペアワークやグループ活動) を重視する
- ・異文化理解や国際問題の要素を入れる
- ・内容と言語の両面での足場 (学習の手助け) を用意する
- ・4 技能をバランスよく統合して行う
- ・学習スキルの指導を行う

(参考文献 1)

2. モンゴル国との研究・教育交流

岡山理科大学とモンゴル国は、これまで恐竜の研究、好適環境水の研究、民族の歴史と自然環境変遷の解析に関する研究、獣医学部との交流協定など、多様なつながりのもとに、各分野での研究協力を進めてきた。2018 年には、モンゴル国立教育大学とも協定を結び、研究と教育の両面における協力体制が構築された。モンゴル国では、全国の学校に勤める教員の 80%以上がモンゴル国立教育大学の卒業生であり、同大学は、国全体の教員養成の中枢を担う位置づけとなっている。岡山理科大学と同大学間との教育に関する交流については、コロナ禍により 2020 年の活動は延期となったが、2018 年以降、岡山理科大学教育学部の教員による 5 回の訪問を通して、学校現場での新しい教育実践の試みや地域での教育活動について共同研究を進め、その成果を発信する機会も得てきた (参考文献 3, 8)。2019 年からの 2 年間は、岡山理科大学の学生によるモンゴル国での授業実践も実現し、モンゴル国立教育大学の学生との学生交流や協働による教育イベントの実践も実現した (参考文献 3)。

3. モンゴル国での CLIL 教員研修

モンゴル国では、外国語教育が熱心に取り組まれる中、外国語の中でも日本語を学ぶ学習者の割合が他国と比べても非常に高く、日本語教育を重点的に取り入れたカリキュラムを持

つ学校が増えてきた。その中の一つであるナラン学校は、首都ウランバートルに位置し、日本語を外国語教育の軸に置いたカリキュラムが実施されており、約 500 人の園児・児童・生徒が通う大規模な私立の保小中高校である。筆者は、2018 年秋、科学ボランティアセンター長の高原周一先生とともに、ナラン学校 8 年生（中学 2 年生に相当）を対象に「イオンと電気伝導」に関する科学実験について日本語による CLIL 授業を実施した。この公開授業に CLIL を導入したのは、同校の実践的な外国語教育をめざす教育目標に即した授業ができるアプローチであると見たからである。授業では、ナラン学校の教員だけでなくモンゴル国立教育大学理数学部の Ganbaatar 先生も参観され、見学者からは、系統だった授業展開と生徒たちの活発な授業参加の様子から高評価をいただいた。また、参加生徒からのアンケート結果や理科教員へのインタビューからも CLIL の有効性が感じられる評価が多かった（参考文献 8）。訪問授業を終えた後も、見学された教員や校長先生とのやり取りを通して、2019 年 4 月、ナラン学校の全教員を対象として、CLIL 授業に関する教員研修を開催する運びとなった。本稿では、その際の CLIL 授業実践における教員研修の様子をまとめる。

研修には、保育園の先生や 4 名の日本語の先生を含む 25 名の先生方と校長先生・教頭先生が参加された。また、研修は二部構成とした。日本語以外の先生も、モンゴル語の通訳を介して積極的に参加された。

表 1 ナラン学校での CLIL 授業の教員研修のタイムテーブル

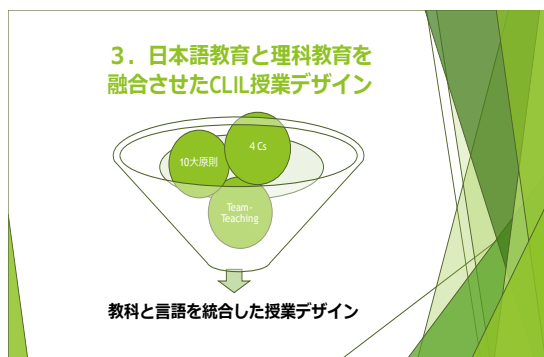
10:00-10:10	<u>CLIL 授業の説明</u> - 授業案 - 日本語と理科による CLIL 授業
10:10-11:30	<u>授業研究</u> - 日本人教員による CLIL 授業の体験 - 授業研究とディスカッション
11:30-12:00	<u>CLIL 授業に関する講演</u> - CLIL 授業の目的 - 4 つの原則(4Cs)の共有 - 授業の枠組みの紹介 - 2018 年にナラン学校で実施した CLIL 授業内容の解説
12:00-12:50	ランチタイム
12:50-14:30	<u>ワークショップ</u> - グループワーク 理科、音楽、社会、数学などの CLIL の授業プランなどの作成 - 各グループによる授業発表 - 発表授業をもとにした全体のディスカッション - 岡山理科大学学生によるサイエンスショー - 振り返り・アンケート

前半では、日本の学校でよく行われる授業研究（Lesson Study）の形式をとり、体験授業

を行った後に参加者によって議論を深め、その後、CLIL に関する理論や原理の説明するセッションを設けた。まず、高原先生とのティーム・ティーチングによって、CLIL のダイジェスト版授業を行い、ナラン学校の先生方には生徒役として参加していただいた。一般的に、CLIL 授業は1人の教員が実施するが、私たちが提案する CLIL 授業は、語学の教員と教科の教員によるティーム・ティーチングのスタイルである。教員同士が共同的に授業を行うことによって、それぞれの専門分野がより活かされ、生徒にとって、1つの授業の中で語学と内容の両方のより深い理解を実現することができる。この体験授業では実物の野菜を用いて「イオンと電気伝導」の実験を行い、授業後は、体験授業の解説も含めて CLIL の理論や原理を解説し、全体での議論を深めていった。CLIL でよく参照される Bloom の Taxonomy（参考文献7）は、思考力・判断力・表現力の育成において言及されるが、ナラン学校ではより学校教育の目標設定に相応しい修正版の Taxonomy（参考文献7）を紹介し、「4Cs」（Content、Communication、Cognition、Community/Culture）の要素を取り入れた言語活動や実験の進め方を紹介した。授業後の全体での議論の場では、生徒側と教師側の二つの視点を交差しながら多面的に CLIL 授業を捉えた議論が深まった。また、日本の学校教育で使用する学習指導案を見ていただくことで、一つひとつの活動を俯瞰的に理解した意見も出され、活発な意見交換が行われた。



CLIL 研修の様子



CLIL 研修の資料より

後半では、ワークショップの形式をとり、前半の研修で得た知見や体験をもとに、5つのグループに分かれて CLIL 授業案を作成していただき、グループごとに授業発表を行う時間を設けた。各グループのメンバーには1名ずつの日本語教師を含み、校長先生や教頭先生も参加された。それぞれ日本語教師のイニシアティブのもと、音楽の音符と音の高さとの関係を扱う授業、生物分野の中でも植物を扱った授業、体育のバスケットボールを取り上げた授業など、専門教科を1つ決めて授業案が作成されていった。授業は、新出語彙や使える日本語表現の導入から始まり、教科内容の割合を増やしていく授業展開の中に、生徒たちのペア

活動やディスカッションの時間が盛り込まれた授業デザインである。発表の際には、グループメンバーや代表が前に立って、作成した教材を提示しながら授業の流れを説明し、1シーンを取り上げて実演していく形をとった。中には、校長先生が自ら授業全体の構想や各活動場面と CLIL の「4Cs」との関連を説明される場面もあり、和気藹々とした明るい雰囲気の中、常に熱心な姿勢で、充実した時間となっていたように感じる。



グループ発表より①



グループ発表より②

また、研修の最後には、岡山理科大学から同行していた科学ボランティアメンバー2年生の学生が日本語で「燃焼と爆発」に関するミニサイエンスショーを日本語で披露し、CLILで取り上げられる多様な教科内容の可能性を示唆した。

現在は、コロナ禍のために渡航は中止しており、オンライン交流が行いやすい状況を利用して、岡山理科大学教育学部・科学ボランティアの学生が作成した日本語による音楽、読み聞かせ、科学の動画を作成し、ナラン学校のオンライン授業教材として提供している。動画を作成した学生たちは、海を越えたモンゴル国での教育活動にオンラインを通して参加することで、異なった視点から学校での学習を捉え、新たな教育実践の有り様を体験する機会を得ているようである。

4. 今後の展望

モンゴル国では、1990年代に民主化へと移行し、その変化は国内の教育実践にも大きく影響を与えている。民主化以降の外国語教育については、「学習者中心」「実践的」「意味と言語使用の両者を高める視点」「コミュニケーション重視」という4つのキーワードが提唱され、教室内でのコミュニケーション活動を通じて、生徒が自律的に学ぶ授業へとシフトしてきた。このような急速に進められているモンゴル国の教育改革の中で、CLIL授業は、新たな教育実践アプローチの一つとして、実践可能な教授法として多様な可能性を持っているといえるだろう。今回は、理科実験と日本語を取り上げたCLIL授業に関する教員研修を行った

が、今後は、日本語以外にも英語を用いたり、内容としても他教科を取り上げたりした授業研究を進め、各学校の特色や教育目標に即した CLIL 授業の多様性を探究していきたい。

おわりに

今回のモンゴル国での教員研修を通して、参加された先生方の授業向上に向けた熱心な姿勢に筆者自身も共感する場面が多くあった。CLIL のフレームワークは、柔軟にアレンジすることができ、多様な取り組み方が可能であることから、学習者や学校や、また国や地域の特性に合わせて、応用して実践することができるものである。また、実践的語学力に加え、問題解決力、知識活用力、批判的思考力、協調協働力の育成を目指すことが可能なアプローチでもある。今後は、日本および海外でも、学校の文脈や学習者の学習段階に合わせた CLIL 授業デザインを構築していきたい。そして、ペアやグループでの活動を通して、学習者が互いの違いを認め合い、言語と内容・文化を考える大切さにも触れる CLIL 授業を創造するなど可能性をさらに広げていきたい。

参考文献

- (1) 池田真, 「CLIL の原理と指導法」, CLIL 内容言語統合型学習, 第 2 巻 実践と応用, p1-30, 2016
- (2) 笹島茂, 「CLIL 新しい発想の授業: 理科や歴史を外国語で教える!?', 三修社, 2011
- (3) 高原周一・坂本南美, 「高校生向けイベントや授業 交流楽しみ 理大学生モンゴル科学ボランティア」, 加計教育, No. 33, p16-18, 2019 年
- (4) 平川尚毅・中野英之・仁科篤弘, 「小学校における CLIL をベースとした地学分野と外国語活動を統合した授業の開発」, 地学教育, 71(1), p1-12, 2018 年
- (5) D. Coyle, 「Listening to learners: An investigation into ‘successful learning’ across CLIL contexts」, International journal of bilingual education and bilingualism, Vol. 16(3), p244-266, 2013 年
- (6) D. Coyle, B. Holmes, L. King, 「Towards an integrated curriculum-CLIL National Statement and Guidelines」, The Languages Company, 2009 年
- (7) L. O. Wilson, 「Anderson and Krathwohl-Bloom’ s taxonomy revised」, Understanding the New Version of Bloom’ s Taxonomy, 2016 年
- (8) N. Sakamoto, S. Takahara, T. Ganbaatar, 「Inquiry into Content and Language Integrated Learning in Mongolia : A Japanese and Science Integrated Lesson at a School in Ulaanbaatar」, 岡山理科大学紀要 B (人文・社会科学), Vol. 55, p43-51, 2019 年

コロナ禍の子どもたちと美術教育

豊岡短期大学 神吉 脩

1、コロナ禍の子どもたち

2020 年から 2021 年、私たちはコロナウィルスのパンデミックの渦中にいます。昨年 2 月のトップダウンによる突然の全国一律の休校要請は、学校や家庭、地域に大混乱をもたらしました。思い出となる卒業式や新しい仲間と出会う入学式も取りやめです。オンライン教育が急速に導入され、学びやコミュニケーションにも大きな変化を与えています。

長い休校期間を通して、学校の重要性もまた明らかになりました。休校期間が解かれ、学校が分散登校から全面再開にいたる中で、子どもたちは大きな喜びをもって登校し、仲間と語り合う楽しさを味わうことができました。ある中学生は「学校では勉強だけではなく、人との関わりや生きていくために必要な力を学ぶのだと、体験から気づいた」と語っています。

その一方で、多くの学校で消毒作業など感染対策に追われ、国の示す標準授業時間数の確保が求められました。土曜授業や 1 日 7 時間授業、行事の削減、夏休みの大幅短縮などで、子どもたちはストレスをため、「マスクをして、友達と距離を保って、急いでたくさん勉強する、考えただけで息が苦しくなり、学校に行くのがつらい」と訴えています。2 月 10 日に発表された国立成育医療センターの第 4 回「コロナ×こどもアンケート」（2020 年 11 月～12 月）では小学校 15%、中学生 24%、高校生 30%が中程度以上の「うつ症状」を抱えていると回答しています。「死にたい、自分の体を傷つけたいと思った」ことがある子どもが 24%、「実際に自分の体を傷つけた」ことがあるのは 16%でした。2 月 15 日には文部科学省が 2020 年の小中学校と高校の自殺数は前年比 140 人増の 479 人(推定数)と過去最高となっていると伝えています。加えて貧困や災害で苦しむ子どもたちもいます。教職員もまたこれまでにない長時間・過重な勤務が強いられています。

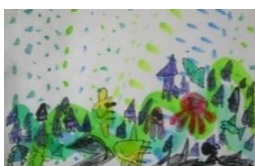
こうしたコロナ禍にあって、どの子にも豊かな生活と表現、生きる喜びを育む美術教育のあり方と実践が強く求められています。

2、コロナ禍に向き合い展開された美術教育

美術教育研究「新しい絵の会」が 2021 年 3 月に発行した『美術の教室』第 105 号(編集代表 神吉 脩)では、コロナ禍に向き合う美術教育構想と合わせて、幼児、小学校、中学校、高校、特別支援学校、地域など、子どもの実態から出発した感動的な取り組みが多数報告されています。この中から 4 つの実践を紹介します。



『マスクをした自画像』千葉・子どもアトリエ・パレット6年/指導 浅野時子



『ジュースの雨』
島根・公立学校1年
指導 藤林優徳



『休み時間 昼休み 鉄棒』
富田林市立喜志小学校3年
指導 岸上三重



『国際交流絵画展』
サンタナ学園/指導 柳田安代
愛知中学校/指導 林栄次

まず小学校6年生が描いた『マスクをした自画像』です。作者は、「この夏は家族旅行もままならず、夏祭りも、花火大会もなく、スイミングも出来ず、映画を見に行く事も出来ず、ずっと家で過ごしていました。最も不満だったことは、父も母も、リモートで在宅勤務となり、自分一人の時間が持てなかったことだ」と言っています。画面の背景には、「夏休みに出来たことや、出来なかったこと、これからしたいこと」が描かれ、マスク越しに見える顔や目の表情から子どもの気持ちが伝わってきます。まさに絵は、私たちに共感と繋がりを呼び起こしています。

次に小学1年生の『ジュースの雨』です。入学したばかりの1年生のAさんは、学校生活への期待と喜びに溢れていました。しかし1・2年生だけの登校となり、不安を抱え時には涙ぐむことがありました。そんなAさんに、図工を契機に大きな変化が見られました。図工の時間、自分の好きな色を用いて、色とりどりの雨を降らします。Aさんは「楽しいね」「きれいだね」と時々声を上げ、絵が出来上がると「できました」と言って持ってきました。受け取った先生の「素敵な絵だね」という言葉に、Aさんに笑顔があふれました。まさに1つの絵が子どもに勇気と希望を与えた瞬間です。担任の藤林さんは「図工の持つ力を信じ、感染拡大に立ち向かいたい」と語っています。

小学3年生の『休み時間 昼休み 鉄棒』は、日々のくらしを綴った日記絵です。毎週金曜日の朝の学習時間の20分間、B5のスケッチブックに鉛筆や色鉛筆で絵を描き、タイトルや日付、言葉を書き添えます。道徳の時間には、大型テレビで映し、絵に込められた思いを伝え合い、交流します。特別支援学級の奈美ちゃんが描いたこの絵は、鉄棒の前回りに挑戦している奈美ちゃんに、4人の友達が応援しているところです。絵の裏には、「みんなが奈美のことを応援してくれてうれしかった。また教えてね」と書かれています。絵を通して共感がひろがり、子どもたちがつながる様子が伝わってきます。

最後に「ARTで知ろう、つながろう、ブラジルと日本」の国際交流絵画展です。滋賀県にあるブラジルの子どもたちが通う「サンタナ学園」が新型コロナウイルスの影響で経営難に陥

っています。一般の学校のように公的補助を受けられず、運営は月謝頼みで保護者の収入が落ち込んでいるためです。そんな中で、「サンタナ学園」に通う子どもたちと愛知中学校の生徒をはじめ滋賀県内の日本の子どもたちが、「ともだち・すきなこと」というテーマで絵を描き、展覧会で展示をしました。絵画展に関わった人々は、互いに国の表現や文化に触れ、新たな気づきや交流のきっかけとなりました。愛知中学校の生徒たちは、サンタナ学園と交流を重ね、展覧会への出品や運営に参加してきました。生徒たちも「様々な文化や価値観を持った人たちと触れ合うことにより、お互いに共感し合い、他人の境遇を自分の事のように考えることができた」、また「絵画などの表現は、国境を越えて感じ合い、通じ合うことができるものだ実感した」などと語っています。

いずれにしても『美術の教室』105号に掲載された実践には共通していることがあります。それは第一に、孤立しがちなコロナ禍にあって、日々の生活や地域のくらしに心を動かし、感動したことを表現し、伝え合い、共感を広げていることです。第二に、美術のもつ力が示されていることです。ここでは美術というものが、人々が理解し合うこと(コミュニケーションの促進)、人々をつながること(社会参加の達成)、共同の輪を広げること(共同体／コモンの創出)、有用感を味わい自分を癒し高めること(感情の純化と救済)、社会の担い手として生きること(文化的主体性の確立)を励ますものとなっています。どの実践も生活を表現することの大切さをものがたっています。

3、生活を表現する意義と実践の検討

今日、筑波大学名誉教授の門脇厚司さんが指摘されたように「他者の喪失」と「現実の喪失」が進行しています。他者の喪失では、自分以外の他者への関心が薄くなって、他者との深い関わりがなくなり、他者を自分の心の内側に取り組むことが困難になっていることです。また現実の喪失では、今ここにある現実の世界がどのような内実と意味を持っているかがよく理解できなくなっていることです。(門脇厚司『社会力の時代へー互惠的協働社会の再現に向けて』富山インターナショナル, p 59-60, 2018年) このような中で、生活を表現する意義は、感知、想像、共感という感性を豊かにする、現実を直視する眼を養い、仲間と共に生きる力を育むことにあります。

それではどのようにすれば生活を表現することができるのでしょうか。それは、表現したくなる内容と意欲を育むこと、表現する力と喜びを獲得できる環境を整えること、表現を認め合うことです。1つ目の表現したくなる内容と意欲を育むことでは、日頃から、身近な生活や自然、人々の営みに関心を持ち、感動したり、驚いたり、不思議に感じたりすることなど、生活を通して子どもの感知・想像・共感するという感性を育てます。さらに生活体験・実感を豊かにすると共に、その中身を話し合い、考え合い、伝えたい内容をつくりだし

ます。2つ目の表現する力と喜びを獲得できる環境を整えることでは、現実を単に描写するのではなく、現実の中から真実(主題)を発見し、表現します。あくまで「何を」の後に「いかに」を追求し、表現力と喜びを獲得できるようにします。3つ目の表現を認め合うことでは、作品を通して子どもが何を考え、何を表現しようとしたのかを理解し合います。

そこで日々の生活の中で、気づき・想像し、思いをつのらせ表現した作品を通して、実践のあり方について考えたいと思います。



『受験生と私の家族』加古川市立両荘中 3年／指導 神吉脩



『かまくらづくり』
久慈市立小国小学校 1年
指導 岩間政信



『母の祈り』神戸市立盲学校中学部 3年／指導 福来四郎



『週末』
滋賀県立玉川高等学校 2年
指導 多胡善伸

まず中学3年生の『受験生と私の家族』です。高校受験をひかえた中学生は、自分の行く道、生きる道を自分で見つけ、自分でできひらく課題に直面せざるを得ません。『受験生と私の家族』では、「この気持ちをわかってほしい、思いを受け止めてほしい」とやむにやまれない要求から出発して、受験生の私とそれを取り巻く家族との関係、父、母、兄、弟の様子がきめ細やかに表されています。自分を取り巻く状況を対象化しながら、家族とのあり方を問い、困難を乗り越え、もの見方や考え方を深め、人間的に成長する様子が読み取れます。

次に小学1年生の『かまくらづくり』です。子どもたちは雪が大好きです。雪が降っている校庭に飛び出し、思いっきりで遊んでいます。大きなかまくらも作っています。子どもが上に乗ってもつぶれない丈夫なかまくらです。この絵は、思い存分に雪遊びをした後で描いたものです。指導した岩間さんは「現代の社会では、『生産・労働』が子どもたちに見えにくくなっています。だからこそ『子どもの思い』に目を向け、思いや感動を引き出す実践、生活の中から価値を見出す実践を大切にしたい」と語っています。

さらに盲学校中学部3年生の『母の祈り』です。この作品の作者は、「母は私に”おまえに苦勞させてすまん”といった。当時、私はその言葉の意味がよくわからなかった。優しく信心深い母だったが、今はもういない。母は私の心に生きている。」と語っています。作者の母への思いがひしひしと伝わってきます。ここには「小手先のテクニックに翻弄されることのない、彫塑表現の本質的な意義や値打ちが表されている。」(竹井 史)と言えます。

最後に高校3年生の『週末』です。高校生は、思春期の「混乱」から脱しながら、大人の社会を展望し、大人の社会でどのように生きるのかという課題に対して、真剣に模索しています。作者は、「仕事から帰ってきて、母と父が仕事のことを話している様子を見ているうちに、会社の仕事で疲れて寄り道をし、同僚と居酒屋で上司の悪口や愚痴をこぼしている姿を想像しました。擬人化した熊やパンダはこのイメージに合うのではと考えました」と語っています。この絵には、高校生の美術表現の特徴である技術的な精巧さと、抽象性・思想性・社会性のある思考や表現が見事に発揮されています。

4、「どの子にも豊かな生活と表現、生きる喜び」を求めて

2020年10月3日から1月8日に飯田市美術博物館で「竜岡児童画100周年—自由の丘の熱き記憶」開催されました。また11月12日にはNHKBSで「想画と綴り方～戦争で奪われた子どもの心～」(山形放送)が放映されました。コロナ禍の中で、生活現実を直視し、表現する美術教育を考える機会にもなっているのではないのでしょうか。

いずれにしても美術教育は、遊びや生活と切り離しては成り立ちません。豊かな生活なくして豊かな表現はないし、豊かな表現なくして豊かな生活はないのです。生活における子どもの豊かな感性が表現に結実し、子どもの人格を育みます。表現が人と人を結び付け、生活に変化をもたらします。生活と表現を子どもと共に創ることが大切なのです。私たちには絶えず表現から子どもの生活や生活感情を読み取るとともに、表現においても現実の具体的な生活や生活感情を細やかに見つめ、それに根ざす内容を考えることが求められています。

【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」第90号では小山悦司所長、坂本南美氏、神吉脩氏の3編のエッセイを掲載しました。

小山所長は「教員のICT活用能力をどう高めるか」と題して、教員にICT活用能力が求められる背景と活用能力を高める上での留意点について述べています。坂本氏は「モンゴル国におけるCLIL授業に関する教員研修」と題して、多様な面で研究・教育交流関係にあるモンゴルの学校で、岡山理科大学教員グループが現場教員を対象に実施したCLIL(学習者の目標言語を用いて教育内容を学ぶことにより、両方の能力を向上させる教授法)授業に関する教員研修の様子を報告しています。さらに、神吉氏は「コロナ禍の子どもたちと美術教育」と題して、コロナ禍に向き合う美術教育の実践のあり方について報告しています。

今回掲載した3編は、教育現場が直面しています課題への一つの解決策が示されており、これらの解決策に対する今後の動向が気になるところであります。その意味でも、3編とも興味を持って読んで頂けるものと確信しています。(T.A)

編集・発行：国際教育研究所
〒710-0821 倉敷市川西町 11-30
加計国際学術交流センター内
TEL (086) 423-1611 (代)
FAX (086) 423-1668